

暮らしナビ

パリから高速鉄道ユーロスターでロンドンのパンクラス駅に降り立つと、静かな雲が空を流れていた。平日の朝なのに周囲は観光客の訛り声ばかりで、いつもの活気がない。トランクを転がす人の塊を踏み分けながら大英図書館の正面入り口へ向かうと、車道側に建つ屋根つきのバス停に掛かるひとときわ大きなポスターが目飛び込んできた。文字ばかりで、絵はない。

英国のメガバンク、HSBCの広告だ。黒い文字の上に浮かぶ赤いロゴと、左下の隅に小さく印字された行名で分かった。英語で書かれた文字を翻訳すると次の通りだ。

「私たちは島じゃない。アメリカ映画を堪能し、スウェーデンの家具を組み立て、韓国製のタブレットを叩き、アルゼンチンのストライカーを応援

しても気づく。パリでは黄色いベストを纏った集団を見たが、こんな痛快な抗議ではなかった。後で調べると銀行が今年1月にキャンペーンを打ち始めた時から喧嘩騒ぎの議論が起きていた。広告内容を支持する残留派の声の向こうに「イギリスは島だ。地方の人間を失業に追い込んだのはお前らのせいだ、綺

麗ごとを言っちゃダメだ」と投げ返す離脱派も負けていない。ついにBBCの取材に対し銀行は「文言はアレグシットとは直接関係ない」と控えめな態度に転じていた(1月7日配信)。

すぐれた風刺とは笑いで刃を包み、相手をちくりと刺すことを条件とする。とすれば平日のバス停に立つ人々には、ポスターが呼びかける「大きい物の一部になろう」という主張はあま

り響かないかもしれない。しかし注意深く読み直すと、違つことが見えてくる。「響き」と呼ぶに相応しいもう一つの声がこの一文の中に埋め込まれていた。

それは、17世紀英国詩人のジョン・ダンが残した「なんびとも一島嶼にあらす」(no man is an island)という名言だ(『不意に発生する事態に関する瞑想』より)。広告文の最初と最後は詩人が拵えた「瞑想」の世界を巧みに匂わせている。

右の名言は「自己完結せず」と受けて次のように続く。「人はみんな大陸の一欠片であり、本体の一部分である。ひとつの塊が海に揺られたらヨーロッパはその分減るのであり、それは、あたかも岬であったり、汝の友人、あるいは汝自身の館が

そのように削られてゆくようなことである」(筆者訳)

話を戻すとこの広告は、海に浮かぶ素晴らしき塊とは絶海の風雨にさらされ内へ閉じるのではなく、塊として元来つながっていた大きき力強い根源的な「本体」との連携を「層々々確かなものにして開かれるべきだ」というメッセージを発していた。

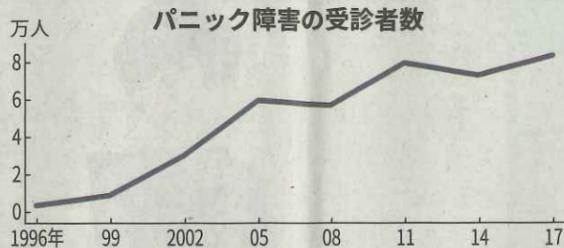
飲食物や映像、家具や電子機器など消費財の多様な交易をすることで「私たち」というアイデンティティーは確立し、育つてゆくという印象を与えるものでもある。

わたしはバスを待つのではなく、後ろに聳える大英図書館に入ろうとしていたのでポスターの前から離れた。図書館は大陸に向かう大客船のように、わたくしを迎え入れてくれた。(日本文学研究者)

ライフサポート

パニック障害もって知って

患者らが講演や情報共有



厚生労働省によると、パニック障害の受診者数は1996年に約3千人だったが、2017年は約8万3千人に増えた。専門の医療機関が増えるなど認知度が上がったことも背景にあるとみられる。

大阪府医師会の阪本栄理事(精神科)は「発症のきっかけがない」とがこの病気の特徴。誰もがなり得る可能性がある」と指摘する。

効果的な治療法の一つである認知行動療法は、少しずつ成功体験を重ねさせて、不安に対する耐性を高める。例えば急行電車の乗車時に発症した人の場合、最初は発作が起こらない範囲で、無理せず各駅停車で1駅だけ乗車する。克

誰もが患う可能性

専門医に早めの相談を

服できたら徐々に乗る区間を伸ばし、「ここまで乗っても大丈夫」という心理状態を積み重ねる。

森田療法は精神科医、森田正馬が1920年(大正9年)ごろに生み出した治療法で、「症状は治さなくていい」としてあるがままを受け入れる心理療法だ。このほか、神経伝達物質の崩れを整えるための薬剤治療も効果がある」とされている。

発作を恐れて外出できなくなり、うつ病など他の精神疾患を併発する患者もいる。阪本理事は「パニック障害が疑われる発作が繰り返すなら、専門医に早めに相談してほしい」と話している。

安心感で発作起きにくく

突然死するのを目の当たりにした。「自分も体調が悪くなったとき、同じように苦しんで死んでしまつたのではないか」。そう考えるようになり、少しでも体調が悪いと、動悸や息切れがするようになっていたという。発作を起こしたのは日々の疲れで体調が悪化し、同僚の突然死を思い出したときだった。

半年後に不安を完全になくそうとせず、ありのままに受け入れて付き合っていく「森田療法」を知った。それ以降、不安を感じても大きな発作を起こさずに過ごしている。岡本さんは「症状や程度は人によって全く違つ。自分に合う治療法や対処法を見つけてほしい」とアドバイスする。

精神疾患の啓発や普及活動を行う「シルバリーボンジャパン」(横浜市)は年に10回程度、学校や企業などで、パニック障害を含め



た精神疾患について講演を続けている。

講演では「パニック障害の患者がいる場合にどう接したらよいか」などを説明する。逃げ場のない満員の通勤電車が発作の原因となる患者も多いため、ラッシュアワーを避けた出勤時刻の設定など多様な動き方を受け入れることを企業に提案している。代表の関茂樹さん(37)は「パニック障害の認知度は近年少しずつ高まっており、講演依頼も増えている」と話す。

患者同士が集まり情報交換をすることが不安の緩和につながることもある。近畿地方を中心に活動する「なかまの会」の会員は約120人。年に数回イベント

トを開き、精神科医を講師に招いて講演を聞いたり、患者同士で悩みを打ち明け合ったりしている。

代表の早野強さん(49)は「周りの人には言い出しづらくても、患者同士なら打ち明けられる悩みがある。会の集まりを通じて少しでも患者の負担が減らせられれば」という。ただ「本心に助けが必要なのは、会合に来られないほど症状が重い人だ」と懸念する。

なかまの会では、会合に来られない人でも情報が得られるように、会報を発行したり、会のホームページに病気克服者の体験談を掲載したりしている。早野さんは「医学的な情報も大事だが、治った人の話や体験を聞くことが何よりも参考になる」と話している。(玉岡宏隆)

海に浮かぶ素晴らしき塊——ロバート キャンベル



プロムナード